

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第189次)

2016年度の夏から秋にかけて、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、儀式遺構の様相解明を目指し、大極殿院南門の前面にあたる、朝堂院朝庭の北端部を発掘調査しました。この調査の大きな成果は、大宝元年(701)の元日朝賀の際に立てられた7本の「幢幡」に関わる遺構と考えられる、7基の大型柱穴の存在があきらかになったことです。

2008年度の第153次調査で、藤原宮中軸上に1基、その東に三角形状に並ぶ3基の大型柱穴を検出していましたが、今回、藤原宮中軸を挟んで西側の対称位置にも同様の配置をする3基の大型柱穴を新たに検出しました。これにより、藤原宮中軸上に1基、その東西に各3基が三角形状をなす、合計7基の大型柱穴の存在があきらかになりました。これらの大型柱穴は、全体として藤原宮中軸を挟んで対称に配置されており、その位置関係や構造、規模等から、一体的に設けられた、儀式に関わる旗竿遺構と考えられます。

藤原宮の大極殿院南門付近でおこなわれた儀式に関する史料としては、『続日本紀』にある大宝元年(701)の元日朝賀の記事が広く知られています。それは、大宝元年の元日朝賀の際に、中央に烏形の幢、北からみて左(東)に日像、青龍・朱雀の幡、右(西)に月像、玄武・白虎の幡という7本の「幢幡」

を正門(大極殿院南門)に立てたというものです。『続日本紀』の編者は、この様子を「文物の儀、是に備れり」と記しており、律令国家完成の宣言と一般に理解されています。

今回確認した7基の大型柱穴は、その数や検出位置がこの記事と一致しており、昨年・一昨年度に調査した大極殿院内庭を含めて、他に候補となる遺構が検出されていないこともふまえると、大宝元年の元日朝賀の際に立てられた7本の「幢幡」に関わる遺構として、最も有力な候補といえます。『続日本紀』に記された大宝元年の「幢幡」の記述と、藤原宮朝堂院朝庭で発見した7基の大型柱穴との対応関係を復元すると、中央に烏形の幢、その東に日像、西に月像、東北に青龍幡、南東に朱雀幡、西南に白虎幡、北西に玄武幡となります。

これら7本の「幢幡」の具体的な姿を直接知ることとはできませんが、奈良文化財研究所では2002年に開催された「飛鳥・藤原京展」の際、「文安御即位調度図」という平安時代の儀式を描いた絵図を参考に、縮尺3分の1の復元品を作りました。この復元幢幡を実際に遺構が検出された位置付近に配置し、写真撮影をおこないました。この様子を、新聞の紙面等でご覧になった方もいらっしゃるかと思います。

7本の復元幢幡が調査区内に立った時、古代史上の歴史的一場面である大宝元年の元日朝賀の情景が目の前に浮かび上がるようで、調査担当者一同、大変感動しました。(都城発掘調査部 大澤 正吾)



大宝元年元日朝賀の様子(南から)。赤い柱が大極殿院南門、その奥の森が大極殿